

になりぬ、あやしうまほれば、たる心ちまながら、三たびになるべきあかつきよりおきゐて、佛のおまへにて、こゝろを一にしてほくろきやうをよみつ、そのまゐるしにや、なごりもなくおちたる。

〔看聞日記〕應永廿三年九月廿日、予風氣又萌、大略瘧病歟、以外令病惱、抑大教院大納言律師隆經眞經、明日可傳法灌頂云々、爲後記、可有御助成之由申之間、桃林一頭被送遣牛童、畏申紆豐爲堂、童子罷向云々、月見岡松茸新御所推野以下取之、予依違例不參、珍暉喝食日野一、禪門被相伴、寺長老弟子也、廿四日、有地藏講、善基參勤如例、先齋食、次讀講式、地藏名號、侍臣唱之、頭人椎野、舜藏主、女中以下人々也、瘧病又發、種々雖落無効驗、令計會、廿四年九月五日、瘧病發日也、退藏僧有秘術之由、申令落之、寅時汲井水東方、吞神符、以桃枝拂身、其効驗歟、今日落畢、

永享四年五月十一日、城愛座頭參平家語、此四五年不參、若宮瘧病未落、入夜猶發、計會也、

〔叢桂亭醫事小言三〕瘧

府下八九年追年テ瘧多ク、寛政三四年、寒暑ノ分モナク、四季共ニ多ク、頰白以上赤子ニモ瘧アリ、赤子ハ思ノ外ニ困セズ、小兒モ順ジテ輕ク、中年以上ノ人ノウイ瘧ニハ或ハ絶粒食、疲弊シテ起居外候トモニ危篤ニナル人多ク見ユレドモ、必死ニ不至、病因考ニ、瘧痢同因ト論ジテ有ヲ、トクト按ズルニ、痢ハ裏ニ入ル故ニ死ニ至リ、瘧ハ表ニ病ム故死セズト見ユ、

〔松屋筆記六十三〕瘧をおとす方

續博物志二七丁に、蛇蛻塞兩耳治瘧疾とあり、

〔醫心方十八〕治鬼瘧方第十四

范汪方治鬼瘧

丹書額言、載九天書臂言、枹九地書足言、履九江書背言、南有高山、上有大樹、下有不流之水、中有神